



# 新品種『ながす羽衣琉金』誕生

## ながす金魚の新たな挑戦



水中を優雅に泳ぐ3匹の金魚。その名は『ながす羽衣琉金』。

長洲町養魚組合が品種改良を重ね、ことし新たに誕生した金魚です。

そして、新品種誕生の裏には、ながす金魚の未来を見据え挑戦する生産者の姿がありました。

今号では、新品種誕生までの軌跡と、養魚組合と町の新たな取り組みを通じて、ながす金魚の未来について考えます。

### 積み重ねた5年の歳月―

#### 挑戦、苦悩、新品種が誕生するまで

たった1匹から始まった品種改良への挑戦。『ながす羽衣琉金』が誕生するまでに費やされた5年もの月日の中には、新品種誕生にかける生産者の苦勞と熱意がありました。

#### 始まりは1匹の金魚

養魚組合が品種改良に取り組みることになったのは、いまから約5年前。町の伝統産業である金魚養殖業をよみがえらせ、まちの活性化につなげようと、養魚組合と町が協力して新たな取り組みをスタートしたことから始まりました。その取り組みのひとつが金魚の新品種開発に向けた挑戦です。

挑戦の始まりはたった1匹の江戸川琉金。赤と白の色しかもたない江戸川琉金の体に小さな黒い模様が発見されました。本来、普通に育てているとこれらの模様は消えていくものの、1年経過しても消えませんでした。そこに養魚組合が着目。この黒い模様をもつ金魚を増やし

ていくことから新品種への挑戦は始まりました。

#### 飽くなき挑戦の果てに

金魚の産卵時期は年に1度の5月。たった1度の産卵期に合わせて交配を繰り返していきます。毎年2万匹もの金魚が産まれるなか、2年目は2匹、3年目は4匹と少しずつ黒い模様がが増えていくものの、まだまだ部分的にしか見られませんでした。しかし、4年目には黒の割合が増えた10匹が誕生、そして5年目となる本年度、白黒・赤黒の鮮やかな色をもつ、これまでにない江戸川琉金がついに誕生し、養魚組合によって『ながす羽衣琉金』と名付けられました。

### INTERVIEW



品種改良に携わった  
長洲町養魚組合  
島崎 龍治さん (宮崎区)

5月に2万匹の金魚が産まれ、夏場に1匹ずつチェックしていき、10月には500匹まで絞り込みました。金魚はデリケートなので、病気になるような注意も必要です。地道な作業を経て1年がかりでやっと成果がわかるので、苦勞も多く根気が必要な作業でした。

新品種に取り組み始めた当時は、10年かけてもできるかどうかかわからないと周囲にも話していましたが、5年という期間でひとつの成果が得られたことは大変うれしく思います。

#### 美しい姿を多くの人に

『ながす羽衣琉金』の特徴は白黒・赤黒の鮮やかな美しさです。特に白と黒・赤と黒などの

### 新品種として確立したい

模様の境目がはっきりしていて美しさを際立たせています。そして、江戸川琉金から受け継いだ形と4つに分かれた美しい尾びれも見どころです。優雅に泳ぐ姿を多くの人に見てほしいです。

#### 新品種確立を目指して

品種として確立するには、産まれる金魚の3割を『ながす羽衣琉金』として生産できるようにすることが必要です。現状は1割程度なので、まずは安定した生産が目標です。やっと新品種確立への道が開けたところですが、これからは2色混合だけではなく、白・赤・黒の3色混合も産み出したいです。そのためにも、多くの皆さんにお届けできる生産体制を整えることが重要だと思っています。



養魚組合の新たな挑戦は続く



# 金魚のまち活性化に向けた挑戦— 養魚組合×町の新たな取り組み

時代の流れとともに表面化する課題。金魚のまち活性化に向けて、養魚組合と町が協力して課題解決に向けた新たな取り組みを行っています。

## 金魚のまちが直面する課題

町の金魚の歴史は古く、江戸時代までさかのぼります。明治初期に金魚のエサにミジンコが適していることから、金魚の大量生産が可能となり、養殖が始まったことが、伝統産業である「金魚養殖業」の礎となっています。

これまで、「ジャンボシガラ」を開発するなど生産者の努力は、「ながす金魚」のブランドを築き、全国有数の産地へと導いてきました。

しかし、近年の金魚養殖業を取り巻く環境は厳しく、趣味の多様化などを背景に需要が減少。最盛期に約80人いた養魚組合員も現在では14人となり、町の伝統産業である金魚養殖業が生産者の高齢化や後継者不足という課題を抱えています。

## 金魚のまち活性化に向けた新たな取り組み

伝統産業である金魚養殖業をよみがえらせようと、町は平成25年度に「金魚養殖業調査研究事業」を創設。3つのビジョンを掲げ、養魚組合と町が協力し、新たな取り組みがスタートしています。

### 金魚養殖調査研究事業 3つのビジョン

- ・「ながす金魚」のブランド化へ向けた新品種開発
- ・エサとなるミジンコの調査研究
- ・「ながす金魚」のPR・販路拡大を目指し、全国有数の産地や金魚関係者とネットワークの構築



▼金魚増産へミジンコ調査研究

▲次世代を担う子どもたちへ金魚学習会

この事業に取り組んできた結果、新たな「ながすブランド」として「ながす羽衣琉金」の誕生や安定生産に必要なミジンコ培養技術の確立などの成果が開始されています。

全国有数の産地である愛知県弥富市、奈良県大和郡山市や金魚坂（東京の老舗金魚問屋）との交流も始まり、ネットワークの構築も進んでいます。

また、県知事へ「ながす金魚」の寄贈、秋篠宮同妃両殿下へ「ジャンボシガラ」の献上を行うほか、次世代を担う子どもたちへ向けた「金魚学習会」や「ながす金魚展示会」を開催するなど、新たなプロモーション活動にも力を入れています。

## 『ながすブランド』を

### 育てていきたい—

新品種『ながす羽衣琉金』の開発、ミジンコの培養技術の確立など、着実に成果を残してきた養魚組合。伝統産業のこれからについて松井組合長に話を聞きました。

## 新品種開発への手ごたえ ながすブランドを見据えて

これまでの新たな取り組みにより、『ながす羽衣琉金』の誕生など、「ながすブランド」としての歩みが着実に進んでいることを実感しています。『ながす羽衣琉金』は、ジャンボシガラに次ぐ新たな「ながすブランド」になると信じています。そのためにも養魚組合として、新品種の確立に取り組みます。

現在、関東地区へ「ながす金魚」を出荷し、特徴である病気に強い強さや、質の高さが市場でも好評を得ています。これからも金魚でつながる連携を強化し「ながす金魚」のPR・販路拡大に取り組むことで、「ながすブランド」として全国に出

荷できる体制を整えていきたいと考えています。

## これからも金魚の産地として

先代たちが築き上げてきた伝統の灯を絶やさないことなく、次世代に繋いでいくことは私たちの大切な役割です。そのためには、後継者や新規参入などの新しい力も必要です。養魚組合、町の枠にとらわれず、企業や大学などと幅広く連携していくことで、「金魚養殖業」に携わりやすい環境を整えていかななくてはと強く感じています。

『ながす羽衣琉金』は、ながす金魚の未来を明るく照らしてくれると信じています。ぜひ町民の皆さんにも直接見て、親しんでもらいたいです。



長洲町養魚組合 組合長  
松井 一也さん（大明神区）

伝統の灯を絶やさないために  
挑戦は続いていく—

## 『ながす羽衣琉金』一般公開



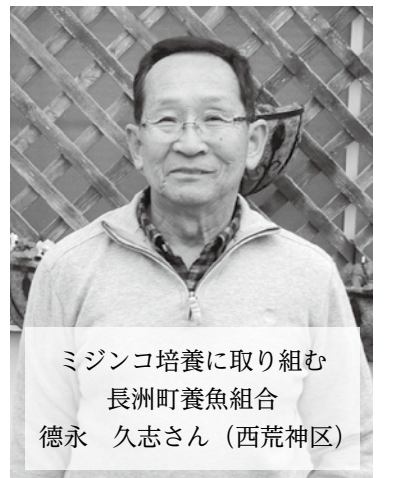
公開期間 1月4日(土)～28日(日)  
場所 金魚の館

新しく誕生した『ながす羽衣琉金』を期間限定で展示します。この機会にぜひご覧ください！



農林水産課 農林水産係 ☎ (78) 3265

## INTERVIEW



ミジンコ培養に取り組む  
長洲町養魚組合  
徳永 久志さん（西荒神区）

## ミジンコの安定供給で金魚の増産へ

平成25年から、ミジンコの安定供給を目指し、それまで各自で生産していたミジンコを養魚組合として生産できるように取り組んでいます。

初年度は40%程度の成果しか得られませんでした。九州・水生生物研究所の協力を得て、3年目には、目標としていた1日あたり3000万匹の培養を達成することができました。

現在では、各組合員にミジンコの安定供給が可能になりました。これからも、良質なミジンコを培養し、金魚増産の一翼を担っていききたいと思います。